ホネホネ団通信

題字・・・盛口　満（なにわホネホネ団琉球支部団長）

なにわホネホネ団Ｒ（琉球）支部　突撃取材！

ホネホネ団Ｒ（Ｒｙｕｋｙｕ）＝なにわホネホネ団琉球支部は、２００４年３月、沖縄県那覇市大道で結成された。団長は「ゲッチョ先生」でおなじみの盛口満氏。副団長スギモッチは、沖縄の昆虫は彼に聞け、と言われるほど腕の立つフリーの環境調査員である。小～高校生くらいの年齢の団員たちもおり、彼らは「骨部」と呼ばれているらしい。

「うちは魚のホネ取りが得意、ヘビもやってる」という電話をうけた団長は急遽その秘訣を探りに旅立った。

死体の腐りやすい沖縄では、哺乳類の皮の処理よりも、ヘビや無尽蔵にある魚のホネ取りに精を出している。魚の仕入先は市場や季節風で渚に打ちあがった深海魚らしい。到着した団長が泡盛をすすりながら見たものは、サキシマスジオ（写真）とホンハブの全身骨格・バラムツのなめし皮・クロガシラウミヘビのなめし皮・リュウキュウオオコウモリの本剥製・キンバトの仮剥製・・・など。手先の器用なスギモッチは本剥製にお手製の「目」まで入れている。これは絵の具で実物に近い目を描き、上から透明度の高いアクリル樹脂をたらして作るもの。小さな容器に入った目の玉コレクションもみせてくれた。ヘビの骨格は教材として持ち運びやすいように、タッパーにぴったりはまるよう作られていた。

ぺらぺらの美しいヘビ皮も、驚嘆もの。これは丸太にぐるぐるとまきつけて干したものだそうな。他にも見渡せば、あちらこちらの柱にヘビ皮が貼り付けられているのがみえた（一応ここは賃貸の部屋）。

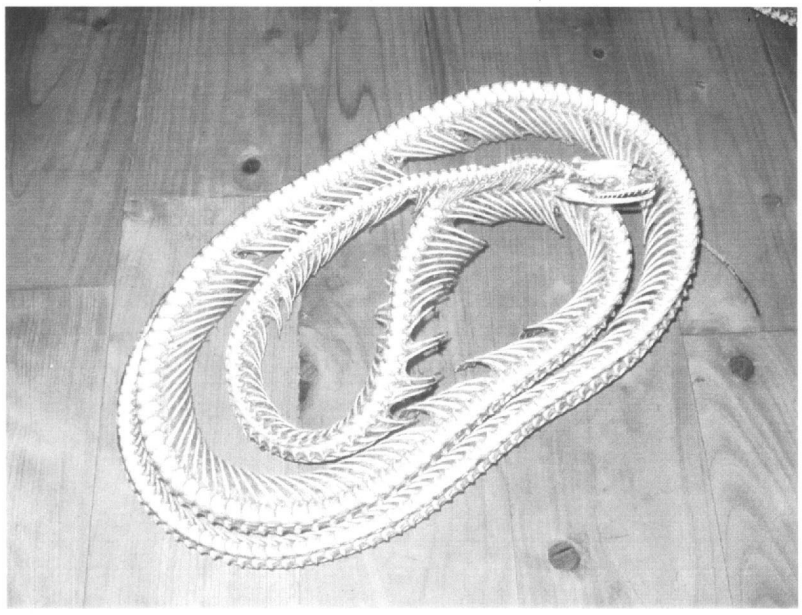
Ｒ支部では湿度と温度の高い沖縄で哺乳類の皮スキルを上げることが難しいと思いながら、おみやげの魚皮を手にふいい、なにわホネホネ団の皮なめし技術へらつく足で宿へと戻ったのだった。

質問が集中した。

ヘビのホネ取り技術とケモノの皮処理技術の心熱き交流。

「死体に対する愛、それが標本」「生きているときの生き物の美しさを標本で表現したい」etc,etc・・・骨取り＆皮なめしトークは、深夜まで続いた。

帰ったら私もヘビ皮やろう、とぼんや（澤　子）



右：サキシマスジオの骨格標本。ヘビは、肉取りを念入りにした後に頭をはずし、胴体と分けて酵素処理をして作るそう。頭はばらばらになりやすいのだ。「ヘビは、頭はポリデントで体はパイプスルーかな。量は適当です」　byスギモッチ

おわび・・・ホネホネ団通信2号において、以下の間違いがありました。おわびするとともに訂正します。誤→正

★なにわホネホネ団活動報告★

2004年７月～８月

7/24 クロツグミ、ヒヨドリ、カワセミ、ツツドリ

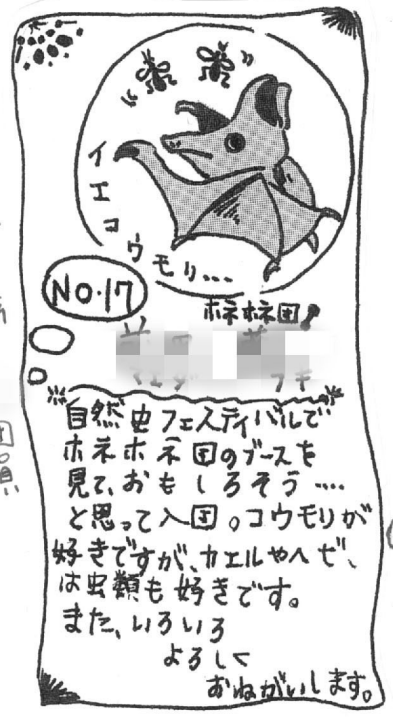
◆7/25 ハジロカイツブリ、トビ、アオサギ、フクロウ、タヌキ、アカカンガルー

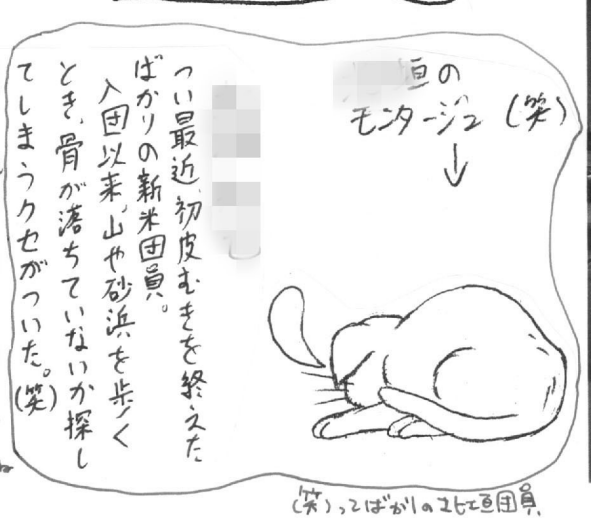
◆8/05 ハクビシン、アライグマ、タヌキ、イノシシ頭（2）アブラコウモリ◆8/11 ジャガー、ヒョウ、カリフォルニアアシカ◆8/25　カラカル

これまでの処理数◆哺乳類11点（累計72点）

鳥類8点（累計31点）

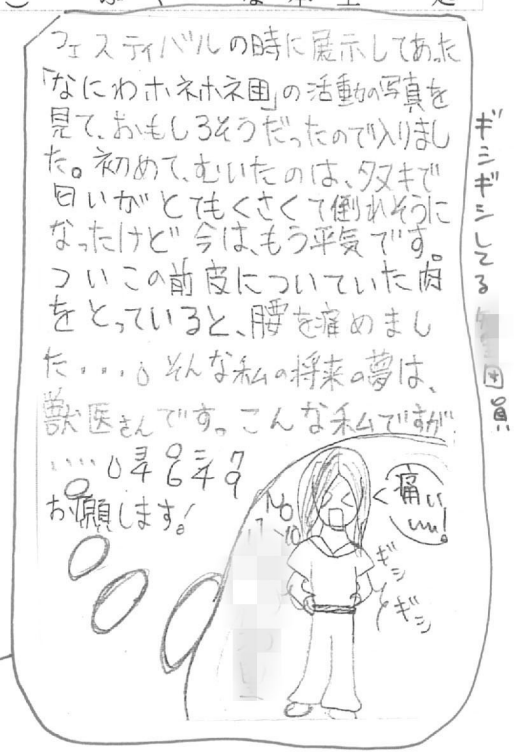
祝 新団員続々入団！ホネホネ的自己紹介。





たるのさんは2Pにあります。

ゾウの足と　団員



団員オススメの一冊を紹介します

ホネの本棚③『骨と骨組みのはなし』

神谷敏郎，岩波ジュニア新書▼０１年６月，７８０円＋税▼ISBN4-00-500374-5 C024

▼そもそも骨とは何からできており，数や重さはどれくらいなのか等，意外と知らない基本を導入部分から教えてくれる。２章では魚類・両生類・爬虫類・鳥類・そして哺乳類は二十一目全て、進化の流れに乗った分類群ごとに特徴を解説する。それに対し、３章以降では頭骨，背椎，前肢，後肢といった部位ごとの骨格の特徴、他種との比較などがわかりやすく書かれており、骨の形ひとつひとつから，その動物の行動・生活，たどってきた長い進化のあとまでを感じる事ができる。

▼哺乳類を中心に骨のスケッチや写真が八十カット以上も掲載されており、かなり嬉しい！カモノハシやテナガザル等のレアな骨を間近で見ることはなかなか出来ないが、図があればそれらの違いをイメージする助けになってくれる。ホネホネ団員的には動物園からいただいた，世界の動物達を手に取る機会があるわけだから，実際に役立つかも。読まなくっちゃね。

ジュニア向けだけど大人にも読みごたえのある一冊。

▼みんなでクジラ山に登るのは難しいかもしれないけど、お馴染みのタヌキ山から動物界を眺めることはできるかも。

…これは読んでのお楽しみ☆　（[redacted]）

樽野顧問のひとりごと的自己紹介

本人が知らないうちに顧問になっていた樽野です．専門は哺乳類の化石で，動物研究室でなく地史研究室にいます．歳は団長や副団長とは親子くらい違います．

兵庫県津名郡津名町（淡路島）出身．高校まで地元の学校へ．初めてホネに関わったのは高校の時．海岸でスナメリの死体を見つけ，所属していた地学部のメンバーといっしょに持ち帰り，解剖して鍋で煮てホネにした．その時の臭かったこと（これは，経験した人でないとわからない）．学校中に臭いが広がってしまった．ちなみに，わが地学部は山岳部的要素もあったため，合宿となると校庭や山で自炊していた．その合宿で使う鍋だった．

その次のホネ経験は大学４年の時で，これまた臭かった．大学では化石の研究をしたかったので，理学部の地質学鉱物学科へ．そこには「化石加工室」という，化石のクリーニングをする部屋があった．ある日，その部屋にはいると異様な臭い．床には一面の腐汁が・・・．私の指導教官が骨格標本をつくるために，イノシシを解剖し，ポリのゴミ容器で水晒しをしていて，容器が割れてしまったためだった．ホネホネ団みたいに，筋肉をできるだけ除いてあれば，それほどひどいことにはならなかったのだが，ほとんどバラバラ死体を水につけただけという状態だったらしく，すさまじかったのを覚えている．「こんなことはやりたくないな」と思ったのだが，その指導教官の薦めで，大学院では哺乳類化石を研究することになってしまった．ということで，ホネとは切っても切れない縁に．

自然史博物館に就職（約30年前）して２週間くらいたったころ，「動物園からバクが死んだから取りに来てと連絡があったけど，忙しいから行かれへん．代わりに行って．」と，そのころ動物研究室にいた学芸員に言われて行ってみたら，「どうぞ」と剥皮刀（メスを大きくしたような，青龍刀を小さくしたようなナイフ）を渡されて，バクを解剖する羽目に．それ以来，大はナガスクジラ（全長19m）から小はコビトジャコウネズミ（頭胴長41.6-43.7mm）まで，ホネにしてきた．ところが，ゾウはまだ解剖したことがない．あやめ池のゾウが死んだ時，機会があったのに，ちょうど北海道のゾウの化石を調べに出張していて，のがしてしまった．この次はぜひやりたい．その時はホネホネ団のみんなも参加しよう．（樽野 博幸）

ザイゲンの骨部屋

毛が抜ける話 ―三味線の皮の作り方―

その１

むかーしむかし、約一年ほど前、あるところにホネホネ団があったのじゃ。その頃、ホネホネ団は活動をはじめたばかりで、団長や副団長と一緒に、細々とタヌキやアナグマなどの皮むきをしていただけじゃった。

そんなある日のことじゃった。冷凍庫に**ネコの死体**があることが発見されたのじゃ。いままでネコの皮をむいたことのなかったホネホネ団の面々は、驚喜してネコの皮むきをしたのじゃ。ネコの毛はタヌキの毛と比べて、柔らかくさわり心地がとてもよい。さぞかし見事な毛皮ができあがるじゃろうと楽しみにしながら、処理をすすめたのじゃ。タヌキと同じように皮むきをして、タヌキと同じように皮を**ゴシゴシ**しはじめた。タヌキと同じように皮の裏の脂はとれていき、快調にゴシゴシしていたところ、ある**異変**に気づいたのじゃ。なぜか毛がたくさん流れておる…。タヌキをゴシゴシしている時も少しは毛が流れるが、どうも毛が多い気がしたのじゃった。そこで、ふと毛皮の表側を見てみると…。突然、実習室に絹を引き裂くような**叫び声**がとどろいたのじゃ。なんと、ネコの背中の毛がとれ、**ただの皮**になっておったのじゃ。それはまさに三味線にするにはぴったりの皮じゃった。

その後、ホネホネ団ではネコの毛はゴシゴシしないということになったのじゃ。ジャガーやヒョウならゴシゴシしても大丈夫な気はするのじゃが、**怖い**ので誰もゴシゴシせん。おかげで、ジャガーの毛皮の脂とりには、やたらと時間がかかったのじゃった。めでたしめでたし。

その２　―香しい毛皮の作り方―

悲劇は、新人団員のU氏がテンの皮を持ってきた時にはじまった。イタチからタヌキ大の哺乳類の皮の処理に自信を持っていたことも、悲劇を生む土壌だったといえるだろう。

脂肪が十分に除去されず、**板のように硬**くなっていたテンの皮を見た我々は、自信をもってテンの皮を**柔らかく**しあげることを**約束**したのであった。

硬くなった毛皮の処理は、まず水につけて皮を柔らかくするところからはじまる。どうせなら洗剤液につければ多少なりとも脂もとれて**一石二鳥**。今から考えれば、ここまでの判断は正しかったといえよう。しかし悲劇はその後に待っていた。端的に言えば、洗剤液につけたまま、その存在を**忘却の彼方に**置いてきてしまったのだ。

それから3日後、悲劇のテンの皮は冷蔵室で発見された。一見きれいなままのテンの皮は、洗剤液から出して水洗いしてみると、無惨にも大量の毛が流れたのであった。その後、皮から脂を除去し、なめし液につけ、乾かした結果、背や腹や耳の一部の毛が大幅に失われていた。**浸け置き洗いはほどほどに**、ということが改めて実感された。

この悲劇の唯一の救いは、テンの毛皮から**洗いたての洗濯物のような香り**がするということであろう。

（和田 岳）

◎次号予告◎

～ホネホネ団飼育部のすべて～

トノサマガエル・アカネズミ・アズマヒキガエル・スッポン・モリアオガエル・・・

動物標本制作室の片すみに、ひっそりと息づく飼育部。その実態にせまる。

ついでに脱走ザンゲも・・・・

団長の◎編集後記◎

ホネホネ団通信もようやく3号．影のファンも増えて毎号100枚ちかく刷ってるのにすぐなくなってしまいます。みなさまのご自宅にB4のコピー用紙や80円切手は眠っていませんか？どうぞ東住吉区長居公園1-23：自然史博物館内和田岳までお送り下さい。ホネホネ団通信1年分をお送りします。

おそいに

だいんちょ拝